

「教育活動の『見える化』の試み」(230906)

脇田孝豪(大阪府立伯太高等学校)

0. はじめに

「God is in the details.(神は細部に宿る。)」という格言がある。「真実在具体に有り」と読み替えて、これが学問世界のみならず、日常生活をはじめとする現実世界においても、物事の真実を考究していく上での基本的態度ではないか。

教育活動においても同断であって、教育活動の根本は、学習者を中心としたあくまで具体的な営みにあることをまず確認したい。つまり、学校や学級の学習者集団の平均や比較に、教育活動の本態があるのではなく、個々の学習者を中心とする日々の具体的な営みの中にこそ、教育活動の根本があるのだ。

1. 学校教育の目的・目標に即した効果検証 がなされているか？

2007年から「全国学力・学習状況調査」が小学校6年生と中学校3年生を対象に実施されてきた。それは、「学力・学習状況」の実態の一側面を全国レベルで調査して、教育課題を明らかにして、その課題解決を図ろうとするもので大いに意義がある。

同時に、その調査は、多様でデコボコのある教育活動の一側面を「平均点」や「得点分布」という抽象的な数値で均して表すものに過ぎず、特に、個々の学習者にとって、教育的に大きな意義のあるものであるとはいえない。

しかし、小学校・中学校だけではなく、多くの高等学校においても、教育活動の成果を学力考査の成績だけで測ることが当たり前になってしまっている現状があるのではないか。

「全国学力・学習状況調査」は、当然のことながら、当該教科・科目の「目標」を明示した「学習指導要領」に準拠して、教育効果の測定がなされる。

同様に、学校教育活動の成果は、『教育基本法』に明示された「目標」に基づき、各学校が学習者及び学校の教育課題等に応じて設定している「学校教育目標」に準拠しての教育効果の測定がなされるべきはずである。

『教育基本法』は、次のように「教育の目的」と「教育の目標」を明示している。

○第1条(教育の目的)「教育は、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない。」

○第2条(教育の目標)「教育は、その目的を実現するため、学問の自由を尊重しつつ、次に掲げる目標を達成するよう行われるものとする。

一 幅広い知識と教養を身に付け、真理を求める態度を養い、豊かな情操と道徳心を培うとともに、健やかな身体を養うこと。

二 個人の価値を尊重して、その能力を伸ばし、創造性を培い、自主及び自律の精神を養うとともに、職業及び生活との関連を重視し、勤労を重んずる態度を養うこと。

三 正義と責任、男女の平等、自他の敬愛と協力を重んずるとともに、公共の精神に基づき、主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養うこと。

四 生命を尊び、自然を大切にし、環境の保全に寄与する態度を養うこと。

五 伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと。」

ここに、「幅広い知識と教養を身に付け、真理を求める態度を養い」と書かれていても、他者や「平均点」と比較しての「学力」等は全く言及されておらず、「学習指導要領」も当然これに準拠している。

具体的な学校事例として、大阪府立伯太高等学校は、『教育基本法』にある「目的」「目標」を踏まえ、次のように「学校教育目標」を設定している。

A. 知力・体力・人間力！ 《自ら学ぶチカラ》の育成

B. 進路実現(自己実現)をめざす！ 《自己コントロールのチカラ》の育成

C. 「人権感覚と豊かな人間性」！ 《人間関係づくりのチカラ》の育成

伯太高校での学校教育目標に即した効果検証は、まずは、【定期考査等での学業成績(平常点等の取り組み姿勢・態度評価を含む)】、これを主な基礎資料として、これまで個々の生徒の指導をすすめてきた。

近年はあわせて、【授業評価】や【学校教育自己診断】、【学校協議会等による学校関係者評価(学校教育自己診断等の評価を含む)】も参考にしながら教育効果の検証をすすめつつ、教育活動の改善に努めている。

しかし、生徒一人ひとりの可能性を最大限に引き出して「自ら学ぶチカラ」(教育目標 A)を育成していくためには、進路実現(自己実現)をめざして頑張る「自己コントロールのチカラ」(教育目標 B)と、それらを底支えする自尊感情と自信をめざめさせるべく、人権感覚と豊かな人間性を培う「人間関係づくりのチカラ」(教育目標 C)の育成を同時併行してすすめる教育活動こそが最も効果的であると考えている。

また、その教育効果の検証においても、上記の「教育目標(A・B・C)」に即して、まずは個々の生徒に即して具体的になされ、それらを個々の生徒ごとに時系列で検証されていくべきで、これらを集積したものが最も基礎的かつ総合的な学校の取り組み効果検証の素材となるものと考えている。

2. 「伯太高校レーダーチャート」開発の背景と契機

(Hakata Educational Radar Chart、略称：「HERC」ハーク)

伯太高校には、他者との比較ではなく、まずは「オンリーワン」として生徒一人ひとりを大切にして、(生活背景等も含めて)生徒理解に努めるとともに、生徒に生き方・在り方を問いかけ励ましてきた人権教育の分厚い伝統がある。

例えば、人権教育教材として開発された「伯太パワーグラフ」は、生徒一人ひとりが自分の来し方を振り返って、自分の現在の在り方を「見える化」して、自分の現在の課題を見つめ、課題解決のためのチカラを引き出そうとするものであった。

この「伯太パワーグラフ」を用いる方法がこれまで一定の教育効果をあげてきたことで、さらに「伯太高校レーダーチャート」を発想できた。

また、自ら人生設計して将来の「夢」を見だし、その進路（自己）実現に向けて準備させ、その営みを学校教育の中で効果的かつ着実に支援していこうとしてきた「進路保障」重視の伝統は、キャリア教育の充実という形で結実している。

進路指導と「Global Studies（グローバル・スタディーズ＝総合的な学習の時間を活用しての人権学習、略称：GS）」のコラボレーション（協働）による、入学から卒業まで３年間のキャリア教育（「実施計画」）を整備・充実させてきた。

しかし、全体としての実施計画（その裏付けとなる教職員の連携体制）が整備・充実してきた中で、車の両輪となるべきもう一つの大きな課題が浮かび上がってきた。それは、個々の生徒への日常の「キャリア教育」指導の徹底である。

個々の生徒への日常の指導は、上記（５）－【定期考査等での学業成績（平常点等の取組み姿勢・態度評価を含む）】をベースにした学級担任と教科担当に基本的にゆだねられてきた。

そこでは、「学習成績」・「出欠状況」に基づく指導が中心となって、「こんな状況では進級・卒業が心配だ」といったネガティブな指導のみに陥りかねないリスク（逆に、成績等が良好な生徒には「進級・卒業さえできればよい」というメッセージを送ってしまいかねない）が常に付きまっとなってきた。

「学習成績」・「出欠状況」に加え、「学習への取組み姿勢」・「目標への準備状況」・「人間関係の在り方（自尊感情を含む）」等も含めて、総合的に『見える化』することで、自分の可能性を最大限に引き出していく上で課題（ボトルネック）となっているところを生徒自身にも気付かせながら、教職員が全生徒に対して効果的に指導していくことができる。

また、この『見える化』により、保護者連携を通じて、家庭の教育力を効果的に引き出すことができるし、学年進行に伴う担任業務の引き継ぎを含めて、教職員間の連携体制のより一層の充実を図ることができる。

さらに、伯太高校は「普通科総合選択制」（総合学科と普通科の長所を活かして、１年生では基礎学力の一層の充実を図り、２・３年生では生徒の興味・関心と進路希望等に対応したエリア・科目を選択できる制度）のもとで「メディア・情報エリア」を有し、整備されているコンピュータールーム ３ 教室半を最大限に活用して情報教育分野においても意欲的な取組をすすめてきた。

例えば、H22 年度から １ 年生全員必修の情報 A の授業の中で、「将来の仕事と進路」をテーマに調べさせ、生徒一人ひとりがパワーポイントを用いて発表して相互評価も行うという取組を実施してめざましい成果（学校教育自己診断による）をあげている。

上記の（８）人権教育、（９）キャリア教育に加えて、伯太高校の情報教育は、校内の情報機器や設備面だけではなく、情報教育担当者を中心とする教職員体制が充実しており、最新の情報機器を活用しつつ、新しい教育ツールを開発し、生徒とともに活用で

きる条件が整っている。

つまり、新しい教育ツール「伯太高校レーダーチャート」は、学校創立以来、生徒一人ひとりを大事に、教職員が一致協力して積極果敢にすすめてきた伯太高校の総合的な学校力を背景に、開発と、即時の実践的な試行に到ったものである。

3.「伯太高校レーダーチャート (HERC)」、開発の現況

上記を踏まえ、新しい教育ツールが備えるべき要件を以下にまとめる。

個々の生徒（学習者）に即したものであること。・・・「絶対評価」が大前提。

教育目標に沿った総合的な効果検証ができること。

・・・教育活動と教育課題の「全体像」（総合評価）が見えること。

生徒自身が主体的に取り組めるものであること。

・・・質問項目に生徒自身が回答を入力してチャートを出力できること。

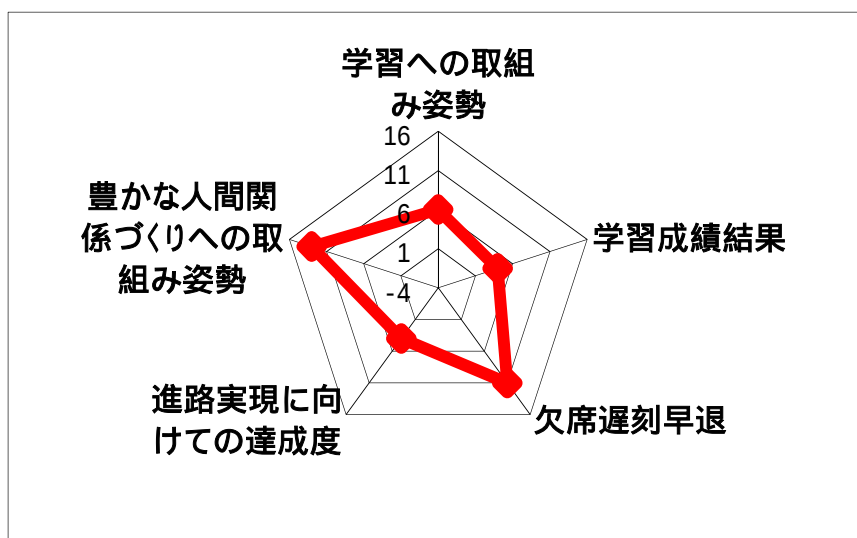
教育活動のプロセスに継続して組み込めるものであること。

・・・学期ごとに生徒が短時間で入力でき、入学以来の成長の跡もたどれるもの。

保護者・教職員による生徒へのエンパワメントにつながるものであること。

・・・上記の ～ 、特に、 を通じて生徒の長所を発見しやすくなる。

下記は、情報教育担当者が作成した「伯太高校レーダーチャート」(試行版)である。
質問項目に生徒が回答入力すると、自動的に「レーダーチャート」が浮かび上がる。



早速、H23 年度 1 学期中間考査成績と出欠状況をもとに、他の項目での生徒の自己評価を入力させて、「伯太高校レーダーチャート」(試行版)を 1 年生の複数クラスで作成した。(念のため、生徒には質問項目への回答とともに、「自分自身の目標」「勉強への取組み姿勢」「中間考査の成績」「豊かな人間関係づくり」「生活習慣の確立」についてのコメントも記述させて、チャートとの整合性も一定確認できるようにした。)

生徒は、質問項目に答えることでチャートができることに驚きの声をあげるとともに、記述式の箇所にも前向きに取り組む生徒が大多数であった。

当該の学級担任に意見を求めたところ、個々の生徒の現状と教育課題が相当な妥当性をもって1枚のチャートで「見える化」できていることの驚きが大きかった。（逆に、極端に小さな5角形となり、心配な生徒が発見できた事例もあった。）

H23年6月の保護者懇談週間で、「伯太高校レーダーチャート」(試行版)を実際に用いて懇談を実施したところ、上記の記述式の部分のコメントとあわせて好評で、保護者が学校の取組みに信頼を寄せてくれるのが担任として実感できた。

現在及び今後の取組みであるが、「HERC プロジェクト」会議をもってツール開発の組織体制を整えつつ、「伯太高校レーダーチャート」(試行版)に実践的な改良を加え、「普及版」作成に向けての準備を現在すすめている。

また、「普及版」作成に向けた検討をすすめる中で、学級担任が個々の生徒の入学以来のレーダーチャートの推移をパソコン上でたどれるだけではなく、学習成績や出席状況等も、成績等のデータと連動させることで、現在の状況及びこれまでの推移を「伯太高校レーダーチャート (HERC)」から即座に呼び出すシステム構築も可能であることが判明してきた。

同時に、生徒の個人情報にかかるセキュリティを厳重に管理できるルールと組織体制について、一層の共通理解とともに再点検を行うことが必須である。

さらに、この「伯太高校レーダーチャート (HERC)」を用いて生徒面談等を行うことを通じて、成績や出席状況等の現時点のものだけを「紙ベース」で見ながらすすめる、いわば「刹那的な」学習指導・進路指導・生活指導から、「時系列で追いながら」これまでの生徒の頑張り(サボリ?)をよりの確に評価しつつ、今後を展望しやすい「未来志向的な」学習指導・進路指導・生活指導への転換を図ることができるのではないか。

4. 「伯太高校レーダーチャート (HERC)」期待できる教育効果

ここで、「伯太高校レーダーチャート (HERC)」を用いた教育実践により期待できる教育効果を以下に列挙しておく。

個々の生徒の教育課題と教育効果を一元的に『見える化』することにより、

生徒本人の自覚と底力をより効果的に引き出せる。

それらを教職員が共有することで、よりの確な生徒指導・支援ができる。

それらを保護者も共有することで、家庭の教育力をより一層引き出せる。

チャートの変遷を通じて、生徒・教職員・保護者が入学以来の教育効果の在り様を振り返ることができる。

これが3年間の教育効果の検証となるとともに、生徒自身の達成感とエンパワメントにつながる。(教職員・保護者にとっても同様である)。

5. 「伯太高校レーダーチャート (HERC)」活用にあたっての留意事項

「試行版」では、伯太高校での教育課題に即して「質問項目」等を工夫しつつ、個々

の生徒への教育効果を確かめながら改善に努めている。同時に、「質問項目」等の工夫により、多くの学校でもこの教育ツールを活用できるよう、現在、「普及版」の作成に向けて検討中である。しかし、「生徒の個人情報にかかるセキュリティを厳重に管理できるルールと組織体制」が必須であることを確認しておきたい。

また、この教育ツールは、伯太高校がこれまで培ってきた人権教育・キャリア教育・情報教育の蓄積と、教職員のチームワークの良さを最大限に活用して取組みつつあるものである。この新しい教育ツールは、あくまで個々の生徒へのエンパワメントをめざすものであって、レーダーチャートの形や大きさ等を比較して競わせるものではないことも再度確認しておきたい。

6. おわりに（「伯太高校レーダーチャート（HERC）」発案に到った課題意識）

小・中学校に限らず、高校現場においても、長年の経験と勘を頼りに教育実践をすすめる優れた先駆者が多かった。学校時代を振り返って、結果としての学業成績というよりも、学習態度や自分の将来への無責任な態度、そして生活規律の方をを叱責された記憶のある人が多いのではないか。

しかしながら、大量退職・大量採用時代を迎え、いわゆる「ワイングラス型」の教員の年齢構成から、貴重なベテランの経験と勘が引き継がれないままになってしまう学校もありうるという危機感に駆られてならない。ベテラン勢がまだ健在な時機に、「教育ツール」を一緒に開発・改良して、これまでの経験と勘を継承していくことができないかと切に願うところである。

「全国学力・学習状況調査」の大阪府における分析を垣間見ると、学校教育の学力規定要因について、小学校 6 年生では、『学校の取組』は、直接的に児童の『学力』に影響を与えるとともに、児童一人ひとりに自信を持たせ、『自己効力感』を育てることを通して、間接的に学力に影響を与えている。」とある。

また、中学校 3 年生では、「学力形成の要因として『学習態度』、次に、『自己受容感』という要因が新たに加わっている」とし、「中学生という発達段階においては、『自信喪失』や『自分がどう思われているか』人の目を気にする等の感情が学力にも大きな影響を与える要素になってきている。」

さらに、「学校教育の学力規定要因については、『学校の取組み』は、生徒の『学力』に直接的に働きかけるよりはむしろ、『学習態度』や『家庭学習の習慣付け』をとおして間接的に『学力』に影響を与えていることがわかる。」とある。

上記の『学習態度』を「学習への取組み姿勢」、『自己効力感』や『自己受容感』を「豊かな人間関係づくり」、『家庭学習への習慣付け』を「進路（自己）実現への達成度」と置き換えるならば、まさしく「伯太高校における「伯太高校レーダーチャート（HERC）」を新たに開発してきた趣旨そのものである。

しかし、『教育基本法』「第二条」（教育の目標）に「一 幅広い知識と教養を身に付け、真理を求める態度を養い」とあることを踏まえ、学校教育活動がしっかりと目標とすべ

きは、表面的な「学力」だけではなく（それはそれで重要な目標だが）、生涯にわたってその学力の土台をなす「学習態度」（学習への取り組み姿勢）の方ではないのか。

大阪府の教育行政も学校現場も、「学力」の一側面だけを肥大化させて教育活動の「成果」を測る、いわゆる「偏差値教育」への批判と自戒を堅持してきたところである。しかしながら、インターネット上で検索すれば即座にわかるように、いわゆる「偏差値」による学校評価がまかり通っている現状がある。

公私立を問わず、教育活動の公共性を考えるならば、当然、学校評価そのものは基本的に公開されるべきものである。

だが、学校教育目標を踏まえた多様な教育活動の中で、数値把握しやすい「学力」の一側面だけが強調されてきた重大な要因は、一定の客観性のある教育活動の成果が学校現場から効果的に発信されてこなかったことにもよるのではないか。

この「伯太高校レーダーチャート（HERC）」の取り組みは、学校教育活動の成果を一面的ではなく、多様な教育観を前提に発信できる可能性を開くものである。

平成 11 年の『大阪府教育改革プログラム』に明記され、現在の『「大阪の教育力」向上プラン』にも継承されている、大阪府の教育改革の大きな柱の一つは、学校・家庭・地域社会の総合的な教育力の向上による学校教育の再生である。

個々の生徒ごとに、多様な教育目標に即した教育効果の測定が簡便に実施できる「伯太高校レーダーチャート（HERC）」のような新しい教育ツールが「普及版」として、どの学校現場でもそれぞれの学校教育目標に即してアレンジできるようになれば、学校と家庭（保護者）との信頼関係がより効果的に形成され、それをベースに地域社会のネットワークも充実していくのではないか。

というのは、「伯太高校レーダーチャート（HERC）」の取り組みの前提にあるのは、まずは、生徒一人ひとりを大切にした「オンリーワン」教育の総合的評価の理念であって、いわゆる「偏差値学力」という一面的な評価だけではないからだ。

戦後 60 数年経ち、戦後教育の第二世代・第三世代の親が保護者として、学校現場に登場してきている。保護者自身も（実は教職員もそうである）事実上の「偏差値教育」の中で育ち、一面的な教育観で子どもを見てしまう状況が当たり前になってしまっているのではないか。

教育に関する国際的な調査の中で、日本の子どもに際立っている「自信」や「自尊心」、そして将来的な展望や意欲の低さは、戦後教育が「偏差値教育」の中で意図せずして、ネガティブに育成してしまったものと言えはしないか。

「伯太高校レーダーチャート（HERC）」の取り組みは、日本の学校教育全体にかかる課題の解決に向けて、学校現場からの一石を投ずるものである。 【9711-9984 文字】